

東京新聞 2023 年 12 月 10 日朝刊社説

＜社説＞週のはじめに考える 人魚姫はナイフを握る

2023 年 12 月 10 日 07 時 16 分

今年も残りわずか。もう新年のあれこれを思う頃ですが、来年のことを言えば鬼が笑うとか。では去年の話から始めましょう。

昨年の 12 月、この欄で作曲家の笠松泰洋（やすひろ）さんをご紹介しました。2019 年、文化庁から海外派遣され、オーストリアのウィーンで自作のオペラ「人魚姫」を英語版で上演して大成功。公演の主役を務めたウクライナ出身のソプラノ歌手ナタリア・ステパニヤクさんから「私の故郷で上演したい」と提案された－という話です。

彼女の故郷はウクライナ西部の古都リビウ。けれどもその企画はまず新型コロナ禍のため、そして何よりもロシアによる侵攻のため 2 度も頓挫します。

そんな不運にも屈せず、上演の実現を志すナタリアさんと、その日を待つ笠松さん。2 人の思いを知ったのがオペラの台本を書いた詩人で、国際基督教大（ICU、東京都三鷹市）学長の岩切正一郎さんでした。2 人を応援しようと「ICU ウクライナ支援『人魚姫』プロジェクト」という組織を結成して、ナタリアさんを日本に招き上演することにしました。

◆日本で実現した上演

公演は今年の 11 月 18 日と 19 日、ICU の講堂で開催されました。ナタリアさんと、リビウの劇場で活躍するバリトン歌手のペトロ・ラデイコさんが出演して、母国の苦境を感じさせない歌唱と演技を披露。終演後、2 人と笠松さんが共演者らとともに舞台に立つと、大喝采が湧きました＝写真。



よかったねーでは済まないのがこのお話で、まずは渡航手続きがひどく厄介だったそうです。

2人は日本で報酬を得る活動ができる興行ビザ（査証）が必要になるのですが、その申請はとても難しいのです。興行ビザで日本に来て不法就労した例があるため、その発給に際しては厳格な審査がなされるからです。

岩切さんと笠松さんが手続きを自力で進めるのはとても無理で、笠松さんの所属するマネジメント事務所に協力してもらわなければなりませんでした。

またウクライナの日本大使館が戦乱のためビザの発行業務を停止しており、隣国のポーランドにナタリアさんが行く必要まで生じました。

複雑な手続きに、ウクライナのナタリアさんからは助力を求める連絡が。笠松さんは何時間も時差のある中、連日深夜まで相談してどうにか申請を済ませました。

実は今年、入管難民法に関する法務省令が改正されました。来日アーティストが国内で滞在できる日数が増えるなど興行ビザを巡る要件が緩和され、「来日しやすくなる」とも期待されたのですが、しかしそれでもなお多くの手間がかかるのが現実です。

「広告代理店がバックに付いているような大きなコンサートでもなければ、外国人アー

ティストが仕事として来日しにくい」と憂う音楽関係者もいます。

外国のアーティストが、入国の制度が厄介なせいで来日を諦めるようなことがあっては、社会的・文化的な損失となりかねません。今回のような、善意から生まれた民間の文化の交流を進めてゆく上でも、政府には制度をさらに改善してほしいものです。

また、ペトロさんの来日はより困難でした。ウクライナでは今、徴兵逃れの対策で、男性の出国が厳しく制限されているからです。このため先述の「プロジェクト」から招待状をペトロさんに送付。所属する劇場から政府に提出し、ようやく許可されました。

戦乱がいかに普通の生活を破壊するか、いかに人の自由な往来を阻むのか。それを改めて思い知る舞台裏のできごとです。

日本は1941年の12月8日に始まった太平洋戦争で敗れた後、一度も戦場にはなっていません。その幸せに感謝し、ウクライナの和平の実現を祈ります。

◆驚くべき結末の意味

最後はオペラのお話です。

文豪アンデルセンによる原作の人魚姫は、愛する王子様と自分のどちらの命を取るかを迫られて、王子様の命を選びますね。けれどこのオペラの中の人魚姫は、その手にナイフを握ると…。とにかく驚くべき結末なのです。

衝撃のエンディングの理由や、その意味は、「人魚姫」を実際に観賞した上で、それぞれで考えていただくしかありません。

日本とウクライナを芸術で結ぶ懸け橋となったこの音楽劇が今後国内各地でも盛んに上演されて、生きることと愛することや、命について思いをはせるきっかけにもなるよう、年の瀬に願います。